2018年3月31日発行

関東学院大学　キリスト教と文化研究所

ニュースレター News Letter

No.43

INSTITUTE FOR THE STUDY OF CHRISTIANITY AND CULTURE, Kanto Gakuin University

巻頭言

小河 陽(学校法人関東学院 学院長)

脱グローバリズムの到来？

2017年度は、いろいろな意味で、激変する社会をしみじみと感じさせられる1年であった。グローバリズムというスローガンの下で、多様性に対する寛容とナショナリズム克服の進展を期待していた私にとって、この一年間の動きでとりわけ忸怩たる思いに駆られたことは、「一致と融和」とはまるで逆の、「分断と排除」に突き動かされたように見えるナショナリズムの台頭と社会的な差別や格差の強化拡大であった。

ヨーロッパ統合の理念の根幹にある人権、自由、平等、民主主義等々の諸価値は、多様性の受容を前提として初めて成り立つ。そして、多様性への寛容は、異質なものの尊重、すなわち「自分と異なること」の受容なくしてはあり得ない。移民排斥、あるいは移民に自国の言語・文化への同化を求めること等の背後には、まさしくこの異質なものの拒否、自分たちと異なった文化や生活様式を認めようとしない意識が見え隠れしているように思われてならない。

このような時代であるからこそ、私たちは改めてキリスト教精神に立ち返る必要のあることを確信させられる。キリスト教はユダヤ教を母体としながら、「神の民」概念を現実のユダヤ民族と同定することから自由になることで、民族宗教の殻を破って世界宗教へと変貌した。この変貌は、ひとりの神のもとにおける多様な人間という現実の認識とその受容なくしてはあり得なかった。人がもしキリストのものだとするなら、「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない」(ガラテヤ3:28)。新約聖書は、同じ一つの霊が一人ひとりに種々異なった賜物を与える、それも、全体の益となるために、と語る(1コリント12:1-11)。この原則を受けて、体の比喩はそれぞれ異なった肢体があるからこそ、全体として一つの体として機能できる、と続く(同12-30節)。

これは多元主義と似て非なる精神である。単に多様性を認容するだけなら、それは自らの真理主張を放棄した相対主義である。キリスト教精神においては、一つの絶対的なものへの信仰ゆえにあらゆる人間的現実が相対化されて多様性が生じる。一元的なものへの信仰が多元的な文化へと土着化するところ、其処に見られる統合と多様性の緊張を保った関係こそ、「キリスト教と文化」を究めようとする私たちが希求すべきグローバルなあり方であろう。

「坂田祐研究グループ」の紹介

―新メンバーの募集―

所員　矢嶋 道文

＊メンバーの紹介

現在のグループメンバーは下記の９名の先生方です。

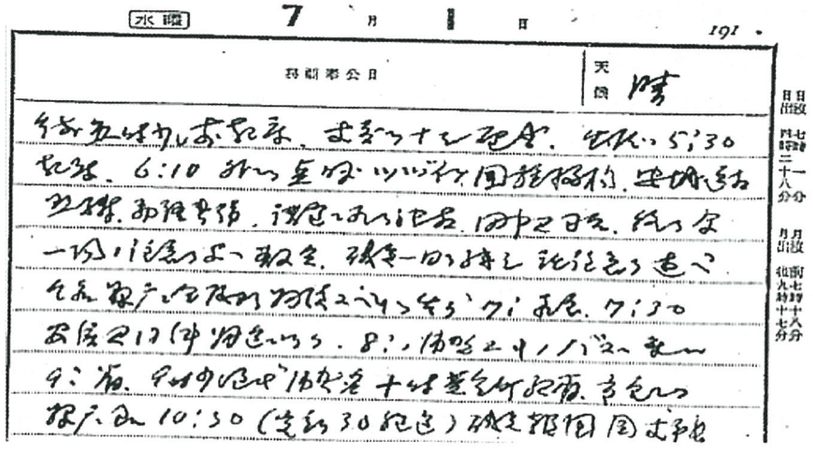
	氏名
所員	矢嶋 道文
客員研究員	帆苅 猛
客員研究員	花島 光男
客員研究員	三浦 啓治
客員研究員	古谷 圭一
客員研究員	小玉 敏子
客員研究員	安田 八十五
客員研究員	影山 礼子
客員研究員	海老坪 眞

日頃は、このほかに経済学部卒業生の真板 久雄さん、客員研究員の原 真由美先生、関東学院教会牧師の高橋彰先生などが参加されています。

＊主な活動

(1)『坂田日記』の解読

これまでグループリーダーを務められていた渡部 洋先生のあとを引き継いでの1年間の活動内容の中心は『坂田祐日記』の解読作業でした。多くの皆様は『日記』といえば“読みやすいもの”というイメージをお持ちかと思いますが、実際には古文書（こもんじょ）に近い筆記体で全文が書かれています。今ここにその一部をご紹介いたしますのでご覧下さい。



皆様いかがなものでしょうか。お読みになれますでしょうか。この部分を解読いたしますと以下のようになります。

1942（昭和17）年　7月1日（水）　　晴

「　午前五時少シ前起床. 支度ヲナシ聖書. 生徒ハ5:30
起床. 6:10 外ニテ点呼　ツヅイテ国旗掲揚. 宮城遥拝
黙祷. 勅語奉誦　講堂ニ於テ礼拝　田中君司会. 終テ余
一場ノ注意ヲ与ヘ散会.　職員一同ヲ残シ諸注意ヲ述ベ
今朝県庁ニ会議アリ帰濱スベキヲ告グ　7: 朝食　7:30
安倍君同伴帰途ニツク. 8: ノ浦賀ユキノバスニ乗ル.
9: 着. 9時少シ過ギ浦賀發　十時黄金町駅着. 市電ニテ
県庁ニ至ル（以下略）」

毎回のテキストは坂田 創先生が解読された文章をさらに古谷 圭一先生が読んで校正し、ワープロで入力された『日記』解読文です。以前は、坂田 創先生による手書きの『日記』の解読文でした。解読不明の部分を出席者全員で読み解き、なるべく不明の部分と誤読の部分がないようにしています。およそ1回に読める量は10日分ほどです。なお、解読と併せて、古谷先生ご提供の『毎日』報道ニュースタイトルから当時の状況（戦況等）を理解しながら進めています。

解読のお目付役は海老坪 眞客員研究員です。海老坪先生は本年93歳になられますが坂田祐先生の講義を直接受けられており、日記の内容に不明な名前などが出てまいりますと「それは○○です」と即座にお答えになります。海老坪先生は昨年コベル宣教師についてのご著書を出されましたので、4月開講の総合講座（「建学の精神を学ぶ」金沢文庫キャンパス）でご講義頂くことになっています。

(2) その他の活動計画

これまで解読してまいりました『日記』を本に纏める計画があります。一部はすでに坂田 創先生によりその抜粋が『紀要』で発表されていますが、未発表のものが未解読『日記』と併せて残されています。坂田 創先生はご逝去に際し多額の出版費用を寄付されていますので、今後はその使用方法を含めて皆様で研究会のあり方を検討する必要があります。

＊新メンバーの募集

今年の3月までは特約教授の矢嶋が所員としてグループ・リーダーを代行いたしますが、現在、坂田研究会に出席されている専任の先生はおられません。是非とも、先生、職員の皆様には月一度の研究会にご参加頂き、校訓（人になれ　奉仕せよ）を関東学院に遺された坂田 祐先生の教えをご一緒に学んで頂ければ幸いです。

所員紹介

社会学部　新井 克弥

私の専攻はメディア論ですが、一般にはややわかりにくい分野です。メディアということばからテレビ、ラジオ、雑誌などのマスメディアをイメージしてしまうからです。しかし、メディアとは、実際には情報を伝達可能にする媒体・手段全てを意味します。

メディアがどのように人々に影響を与えるかが私の研究課題ですが、これを測定する社会実験として現在「ひむかかるた」という郷土かるたの普及活動を宮崎市で行っています。これは宮崎の歴史や文化、産業、偉人などを綴ったかるたで、宮崎の児童に、かるたというメディアに親しむことで地元の知識を学習し、地域アイデンティティを形成してもらうのが目標です。現在、年一回のかるた大会や小学校での地域教育の教材としての利用方法の研究などを小学校の先生、地域のNPO団体と協働で取り組んでいます。

さて、私はキリスト者ではありません。しかし、10年前、本学に赴任した際、坂田祐先生の「人になれ、奉仕せよ」という本学の理念を知り、感銘を受けました。研究者であっても何らかのかたちで社会に貢献するべきという私の思いが認められたように感じたからです。そんな私がキリスト教と文化研究所の所員を務めさせていただいているのには不思議な縁を感じます。

栄養学部　津久井 学

研究所の活動を通しての雑感

2017年4月よりキリスト教と文化研究所所員となりました津久井と申します。食品学や食品加工学などを担当しています。食品は元々生物であり、それを自身のエネルギーとするため犠牲にしているため、いのちを考える研究グループに参加させて頂いております。活動の中で異分野の先生のお話を伺う有意義な機会が得られ感謝しております。私自身宗教とは縁遠い生活を送ってきましたが、改めて考えると結婚式はキリスト教式でしたし、食品分野でも食材、調理加工法、作法など食文化においても宗教が密接に関連していることに気付きます。私は本学に初めて来た際に校訓である「人になれ奉仕せよ」に触れ、それまでの自分は人であったのかと考えたことを覚えています。校訓の様にはいきませんが、自身が学んだことが少しでも社会に還元できればと、本来の研究とは別に、ゼミ生とともにアイスクリーム製造体験、米を科学するなど各種イベント活動を行ってきました。ゼミ生を見ると、私の学生時に比べ修得単位数が多く、学外実習、国家試験勉強など多忙な中、アルバイト代がでる訳でもないのに土・日も朝から晩までイベント作業をしたりと、むしろゼミ生の方が校訓を体現している様に感じています。研究所の活動を通して、キリスト教や校訓について改めて考える機会を与えていただき感謝するとともに、今後ともご指導よろしくお願いいたします。

関東学院大学　キリスト教と文化研究所

〒236-8501横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL：０４５－７８６－７８７３（研究所直通・月～金９：30～17：00）
FAX：０４５－７８６－７８０６（研究所直通・24時間受け付）

発行者：細谷　早里
Director：Sari Hosoya